

地域の底力——日本橋

東京都中央区日本橋

老舗の集まる伝統的な町に
新しい魅力を付け加えていく
人々の集合体・日本橋を訪ねて

大都会・東京都は、実は小さな「地域」の集合体でもある。

それぞれが似通っているようで異なる伝統を持ち、

気質の違う人々が暮らしを営んできた。

江戸のおおきな大店の歴史に連なる老舗、先端的企业が集まる日本橋に、
その特色を活かした地域おこしの現状を探った。

取材・文千葉望 写真 栗原克己



伝統を受け継ぐ店と最先端の高層タワーとが同居する日本橋。多彩な魅力を掘り起こす動きが始まっている。

江戸の伝統を意識した日本橋周辺の地域おこし

大規模な再開発が進む東京・中央区日本橋地区。日本を代表するビジネス街でありながら、江戸にさかのぼる歴史と文化を持つ、誇り高い地域である。高層ビルの谷間を少し歩けば、横町文化の片鱗（へんりん）がうかがえる民家や商店が残り、「ここでなければ買えない」という名品もたくさんある。

だが最近では、東京のあちこちに
ある繁華街の勢いに押されがちだ
った。同じく代表的なビジネス街
である丸の内がビジネス街であり
つつもブランドショップが並ぶ
「週末も楽しめる街」に変わりつ
つある現在、日本橋はどのような
個性を打ち出しながら変化を模索
しているのだろうか。

丸の内は京都から皇居が移転し
た後に造られた地域である。残さ
れた写真に見る重厚なレンガ造り
の街並みは、明治以降の西洋文化

の影響を感じさせる。一方日本橋
は、歌川広重の「名所江戸百景」
の浮世絵からも想像できるよう
に、日本の文化をたっぷりと蓄え
た地域である。同じような再開発
地域おこしではうまくいくわけ
もないだろう。

それを地域の人々はよく知っ
ているようだ。新たに建設され
たビルの中にも、伝統と先端が調和
したテナントが幾つも入って
いる。例えば日本橋室町にある「コ
レド室町」の一階に路面店として
入っているのは、老舗かつお節メ
ーカー「にんべん」本店に併設され
た「日本橋だし場（Nihonbashi
ASHI DASHI BAR）」。
「にんべん」は日本橋に創業して
三〇年余りの老舗。家庭でだし
をひく人が激減した今、本当のだ
しのうまさ味わってもらおう
と出店した。

梅雨時の蒸し暑い日の夕方、入
れ代わり立ち代わり人々が立ち
寄って好みのだしを買い、用意さ
れている塩やしょうゆで味付け
し、さっと飲んでいく。慣れた様
子から、いかにも常連という風情
のビジネスマンもいる。出店から



「日本橋だし場」では、「汁一飯」をテーマに、かつお節だし、汁物メニュー（目替わり）、かつぶしめし、おにぎり、総菜と幅広くメニューを提供している。写真提供：株式会社にんべん

「コレド室町」の地下に設けられた「日本橋案内所」。販売には着物姿の若い女性が携わっている。



地下街に展示されている『熙代勝覧』のレプリカ。江戸時代の風俗が生き生きと描かれており、足を止めてじっくりと眺める人も多い。写真提供：名橋「日本橋」保存会



約八カ月で一四万杯売れたというから驚きである。

「コレド室町」の地下には「日本橋案内所」が設けられている。ここでは日本橋の老舗の名品がずらりと並び、買い物をするしながら伝統に触れることができる。み。「榮太樓」のあめをはじめとする食品はもちろん、手ぬぐい、うちわなどの日用品がコンパクトに並べられ、買い物や仕事のついでにちよつと寄って、日本文化に触れることができるのだ。「和」の文化を伝える他のテナントとでも、よそにはない日本橋らしさを打ち出しているところが、このビルの特徴と言えよう。

伝統的和紙作りの技術で『熙代勝覧』復活に貢献

「日本橋案内所」を出てすぐ目の前の地下街を歩くと目に入るのが、展示されている巻物である。その名も『熙代勝覧』。文化二年（二八〇五）の江戸日本橋を描いた縦四三・七センチメートル、横一二三・二センチメートルの長大な絵巻である。じっくり眺めて

みると、日本橋から今川橋を結ぶ問屋街や、そこを行きかい、暮らす人たちの姿が生き生きと描かれていることが分かる。

実は『熙代勝覧』の原本は一九九九年にドイツのベルリン東洋美術館で発見された。日本橋地下街にあるのはレプリカだという。レプリカに使われた和紙を提供したのは日本橋本町にある「小津和紙」。小津はもともと三重県伊勢の出で、松阪商人の系譜である。北村純夫社長は、

「『熙代勝覧』のレプリカを製作するに当たって、素材を何にするかいろいろな議論があったようです。陶器が良いのではとか。最終的には和紙でいこうということになって、当社にお話をいただきました。とにかく耐久性があって、保存性の高いものが必要です。から、古い歴史を持つ和紙になつたわけです。また、十数メートルもある絵巻に印刷するということを考えれば、印刷適性も必要でした」

と話す。材料には丈夫でしなやか、折り曲げにも強い高知県のコウゾを選び、良い水のある同県の

仁淀川^{によどがわ}工場^にで製造することを決めた。この長さの紙を造るには手すきでは無理で機械を使わざるを得ないが、和紙の質感を出すために巻き取りスピードを極端に遅くした。

「新聞用紙の場合分速一・七キロメートルですが、この紙は分速二メートル（笑）。ゆるゆるとすいていきました。それにインクジェット方式で絵を吹き付けています」

和紙をはじめとして、さまざまな技術を集めて再生された『熙代勝覧』。じっくり眺めていると当時の人々の息遣いが伝わるようで、時間を忘れる楽しさである。

「私は伊勢で会社に入り、六〇年になります。日本橋の光景もずいぶん変わりましたね。当社の周りも以前は織物問屋、薬種問屋、紙問屋などが多かったのですが、さまざまな業種の企業が入るビルとマンション街になっていきます。当社の場合には直接消費者に届く最終製品を売るのでなく原紙を扱っているのが実情です。でも実は、日本橋を起点にする



「小津和紙」の1階には和紙を手すきできる「手漉き和紙体験工房」が開かれている。ここでは無地の和紙と、自分で柄を付けた和紙をすき上げることができる。手すきの難しさを体験することで、和紙の伝統に誇りが持てる。



と近くに神田明神はあるし、美術館もあるし、七〇カ所ぐらい楽しむ場所がある。浜町や人形町があり、芝居を見なければ明治座、食事を楽しむなら小料理屋。買い物

だってデパ地下へ行つて、アジ一匹さばいてもらうこともできる。こないない所はないのでは？
「と思います」

これまでは、その魅力を地元の関係者自身が意識することはあまりなかった。自分たちの良さにはなかなか気付かない——日本中どこでも見られる傾向である。しかしおっとり構えていた日本橋の人たちも、周辺地区の再開

発などに刺激され、自分たちの魅力は何か振り返るうちに伝統を意識した地域おこしに目覚めた。そして、「小津さんも古い和紙部門を拡充してほしい」という要望が出された。

その声に応え、「小津和紙」の現在のビルは土蔵造りをイメージして建てられており、中では書をはじめ「和」の文化を楽しむ各

種の文化講座が開かれるほか、江戸から平成に連なる三五八年の歴史が分かる史料館、ギャラリーがある。

一階には和紙製品や筆、墨を売るショップと、紙すき体験ができる「手漉き和紙体験工房」が設けられている。工房は外国人観光客に大人気という。

地元生まれ育った人々が 目指す日本橋ルネッサンス

松阪商人の系譜に連なる北村社長と異なり、日本橋室町にある料亭「とよだ」の四代目・橋本敬氏は生まれも育ちも日本橋という生粋の日本橋っ子。子息の五代目・亨氏も同じく日本橋っ子。「とよだ」は文久三年（一八六三）に、鯨の屋台としてスタートした。当時の江戸は屋台全盛で、店に勤めている人々は手早く食べられる「ファストフード」として屋台を好んでいた。

「文久三年といえば御一新の五年前。その後明治に入って鯨と仕出しの店を出して今に至ります。最近では接待のお客様が減りま

したので、うちも個人客をターゲットに数年前大改装を行い、それが効果を上げていますね。京料理とは違う江戸料理の伝統を受け継いだ味を楽しんでいただきたいと思います」

と語る橋本氏は、現在「日本橋地域ルネッサンス一〇〇年計画委員会」会長の重責を担っている。

「実は日本橋を良くしていこうという団体は幾つもあります。今外国人観光客が来るのは銀座、秋葉原、浅草で、日本橋が吹っ飛ばしているのです、そこに何とか日本橋も入るようにしたいと中央区も力を入れていますし、私たちもいろいろな活動を展開しています」

委員会が考える「まちづくりの課題」は、

「日本橋地域全体の活性化を目指すためには、地域のつながり、回遊性が必要である。そのためには『通り』と『水辺』の再生が重要な課題である」

とされている。ビジネスの街として効率性を追求してきた日本橋は、広い歩道がある銀座のような「歩く楽しみ」が薄かった。ま

「小津和紙」の北村純夫社長。入社して60年になる北村社長は日本橋の変遷もつぶさに見てきたと話す。



た、せっかく江戸時代から受け継いだ水運の歴史がありながら、上に高速道路が造られたこともあって、水辺の魅力が失われてしまった。作家の故・池波正太郎氏は生前、江戸はヴェネツィアにも匹敵する水の都だったと書いている。大川（隅田川）には各地から集まる大きな船から、屋形船や猪牙など客を運ぶ船、葛飾など周辺地域から野菜を運び商う船が行き交っていた。活気あふれる水運都市・江戸の風情が蘇れば、東京も新しい魅力を持って再生するのではないかと思える。

橋本氏は委員会活動の一環として、韓国や台湾へ渡って水辺を復活させた地域を視察し、企画立案の参考にしてきた。国内では北九州や四国などの成功事例も研

究している。

「水辺の整備は重要なテーマです。川の周りの建物にはいったんどいていただき、大通りの大きな建物に容積移転で移ってもらう。更地になった川べりには、私たちがイメージしている低層の町屋風のお店を川に向かって並べてはどうかと考えています。また緑地帯も作り、船着き場に川の方から船が入ってもらう。羽田空港と日本橋を船で結ばばずいぶん喜ばれるのではないのでしょうか。浅草への定期便はもう出ています。ほかにもお台場やスカイツリー方面などつながるといいと思います」

ヴェネツィアではマルコ・ポーロ空港から船に乗り換え、中心部に入る人が多い。水運が発達しており、細い運河にも水上バスやゴンドラで入っていける。豪華な貴族の館に盛装した男女が消えていく様子は、映画のワンシーンのように美しい。日本橋でも船から料亭やレストランに直接降り立てるようになれば、他のエリアに優る魅力的な街に変貌するだろう。

「調べてみると江戸を造る際参考にしたのはオランダらしいのですが、オランダはヴェネツィアを見本にしたのだとか。日本橋とヴェネツィアは実際にオランダを介してつながっていたわけですから。ちょうど今年には日本橋架橋一〇〇年ですので、ヴェネツィア

のあるヴェネト州のおいしいワインに日本橋を描いたラベルを貼って取り寄せたのを、記念としてこの辺の飲食店で販売しようと思っているんですよ」

本来、東京は水の都である。その意識が失われて久しいが、視点を変えて日本橋を眺めた時、さま



江戸料理の伝統を今に伝える「とよだ」4代目の橋本敬氏（上）は、ここ日本橋の生まれ育ち。今では厨房は5代目の亨氏（右）に任せ、「日本橋地域ルネッサンス100年計画委員会」会長として活躍中だ。





左／1968年（昭和43）から続く『名橋「日本橋」橋洗い』。洗った後は散水車による仕上げ洗浄を行う。下／日本の道路の原点として役割を担う「日本橋」の橋上中心にある「道路元標」も、きれいに洗い上げる。



さまざまな可能性が見えてくるはずだ。

架橋二〇〇年を祝いながら 次の二〇〇年を考える試み

架橋一〇〇年を迎える日本橋は、東京に暮らす人たち以外にもなじみ深い橋である。江戸時代は東海道などの、現在では国道の起点となっているからだろうが、地元の人々の愛着はひとしおであ

る。「名橋『日本橋』保存会」事務局長を務める永森昭紀氏もその一人である。永森氏は百貨店「三越」に入社したのがきっかけで、日本橋の保存活動にかかわるようになった。保存会では四〇年来、橋の清掃活動や日本橋川の浄化活動を行って、環境整備に力を入れてきた。今も二カ月に一度は船を出して川のごみを拾う。

「以前はマナーが悪く、ビニール袋や食べ終わったごみをぼんぼん川に捨てていたものです。川中にあふれるようでしたよ。でも根気よく清掃活動を続けてきたためか、ずいぶんきれいになってきました。大したことをやっていくわけではありませんが、みんなの力を結集して続けていこうと

考えています」

川でも道路でも、少し汚れを放置しておくとならに周りの扱いがぞんざいになっていくものがある。ごみのごみを呼び、地域全体が荒廃しかねない。地域の人々や企業の力を集めた清掃活動は、想像以上に重要な役割を果たしているものと思われる。

努力が実ってきれいに保たれている日本橋だが、首都高速道路にふさがれる格好となつて長い時が過ぎた。景観が損なわれるとして、保存会では高速道路を地下化して周辺を再生する運動を展開している。こちらは高速道路を外すだけでも数千億円の資金が必要とあつて、何十年単位で行われる活動である。



「三越」に入社した後、ひよんなことから日本橋保存活動とのかかわりを深めたという永森昭紀氏。心から愛する日本橋のことになると、話にも熱がこもる。

一方、今年には架橋二〇〇年を迎え、日本橋周辺では多様な記念行事が行われた。七月三十一日は従来行ってきた「橋洗い」のほか、新たに完成した「日本橋船着場」のお披露目を兼ねて、歌舞伎役者の坂田藤十郎氏と市川團十郎氏を招き、「船乗り込み」を行った。また三井ホールで行われた一〇〇周年記念シンポジウムの後で、両氏が「助六」と「藤娘」を踊った。江戸歌舞伎の頭領である團十郎氏の縁の深さは言うまでもないが、上方歌舞伎の藤十郎氏も襲名の際、日本橋川で「船乗り込み」を行った縁があり、今回の参加となった。

「七月十四日の夕方には、水に浮かべるとLEDの明かりがつくボールを川に浮かべました。これは大阪で七夕の行事に使われてきた『いのり星』というボールで、浮かべた後は回収して再利用できます。川面に光が満ちる光景はとても美しかったですね」

このイベントには、東日本大震災の被害を受けて山梨県に避難している東北の子供たちが招待されたという。



下／上方歌舞伎・江戸歌舞伎の大名跡、坂田藤十郎丈と市川團十郎丈が「船乗り込み」で「日本橋船着場」に到着。左／今回の船乗り込みを記念して、日本橋のたもとにある「日本橋船着場」を「双十郎河岸」と命名し記念碑を建立した。



永森氏は日本橋の歴史を調べていくうちに、江戸という都市の魅力を感じるようになった。水運を生かし、雨水を再利用し、廁かわや(トイレ)の大小便を周辺地域の農家に下肥しもじえとして売り、循環型社会を実現していた江戸。当時は世



界に類を見ない清潔な大都市だったという。また川は海から自然の風を送り込む。天然のクーラーの役目も果たしていたのである。

戦後、高度成長を遂げる間にそれらの価値が失われ、注目されなくなってしまう。そのことを永森氏は惜しむ。毎年のイベントだけではなく、長い目で見た日本橋再生を実現するために何をすべきなのか。日本橋にかかわって五〇年以上になる永森氏は、まだまだやりたいことがたくさんあるという。

日本橋つ子の橋本氏のほか、北村氏や永森氏のように外から来た人々が力を尽くしているのは日本橋の大きな特徴だろう。なぜそこまでやれるのか。永森氏はこんなことを言った。

「一言で言えば人の魅力。代々ここで商売をしてきた人たちがいて、『俺はおまえのひいじいちゃんにいろいろ教わって商売を覚えたんだ。だから今度は俺がおまえを仕込むから』というようなつながりがたくさんあるんです。

三〇〇年、四〇〇年続いているお店同士の関係ですね。関東大震災や戦争で丸焼けになり、建物は失われても、気風は受け継がれている。だから僕はこれがなくならんうちに、次の世代を育てなくちゃと思っています。うまくいけば、日本橋は今後五〇年、一〇〇年と元気でいられるはずだから」

さまざまな人が、さまざまな立場から愛着を語る日本橋。それこそが、この地域の「底力」なのである。